

# 一八〇二年の Sitka の戦い (一)

— ロシア人による Sitka 定住地 Михайловская крепость (Old Sitka) 建設と Tlingits の破滅まで

岡野 恵美子

## 一、ロシア人の sitka 進出の幕開け

ロシア領アメリカ史の画期が、制度的には一七九九年八月七日付皇帝パーヴェル一世の元老院へのウカースによる「皇帝陛下の庇護下のロシア—アメリカ会社」<sup>(1)</sup>の成立であり、これにより商人会社の競合状態に終止符が打たれた。以後独占特権を有し国家の保護と監督下にある特権会社が統治を代替し、北緯五五度以北の北米大陸とその周辺のロシア人進出地<sup>(2)</sup>のロシア領土化を進めて行く。事実この会社への統制監督のため同年に Корреспондент の職が設置され、翌一八〇〇年には本社のペテルブルグ設置（イルクーツクからの移転）が決められる<sup>(3)</sup>。しかし制度面でロシア領アメリカが新段階に入ることには異論は無いが、毛皮猟と交易による毛皮獲得を目的とする商人会社が派遣した事業者を中心とするロシア人の進出地であるロシア領アメリカの実態をこの観点から論じることが難しい。近年その研究は、後者が中心であり、原住諸民族の口承伝承も史料として用いられるようになった<sup>(6)</sup>。これとともに非服属・半服属現地民とロシア人・ロシア国家との関係の考察が重要なテーマとなっている。特にロシア領アメリカの領域の中核が「Tlingit の支配領域」<sup>(7)</sup>「Tlingit America」とも称されることから、彼らとロシアの関係を考究することは、ロシア領アメリカの実態の解明に不可欠であろう<sup>(8)</sup>。

さてロシア人が最初に Tlingit に遭遇したのはベーリングの第二回カムチャツカ探検に参加しアラスカ岸に接近した（一八四一年）チリコフ隊であり、A.И. Чirikov の航海日記に記録がある<sup>(8)</sup>。次に彼らがロシア人の記録に現われるのは四十年後の一七八三年、П.К. Заиков が Чурацкий Залив（現 Prince William Sound）で越冬した時の航海日誌である。Заиков の船を訪れた現地民 Chugach が彼に Чурацкий Залив から南東の地域に居住する коллошах について知らせた<sup>(9)</sup>。これはその支配領域の最北に位置する Yakutat Kwáan の Tlingit と考えられる。ベーリング以降約四十年間ロシア人毛皮業者のアレウト諸島から北米大陸アラスカ岸への進出は Prince William Sound までであり、Tlingit の「Land」への境界を越えなかった。一七八四年八月 Kodiak 島に到着した「毛皮王」F.И. Шенников は、一七八六年八月まで二年間の滞在中に最初のロシア人定住地をこの島の Трехсвятытельская гавань（現 Three Saints Bay）に建設し、現地民 Koniagi (Конаги) を服属させた。以後、ロシア人毛皮猟師（フロムィシユレンニキ）と航海士、及び服属させたアレウト列島地域の現地民 Aleut (Алеуты) を中心とするバイダールカの漕ぎ手・狩猟者を商人会社が狩猟団 (напртыя) として組織し、少数のロシア人の指揮の下、毛皮猟（特にラッコ猟）を事業として行われた。一七八六年以降ロシア人は Kenai Bay とその周辺地域に要塞化した定住地を建設し毛皮猟を拡大するが、進出地域は

Prince William Sound までであり、新たに関係を結ぶ現地民は前者の Tanaina (Kenais) と後者の Chugach である。双方ともに半服属の現地民とされるが、ロシア人に対し攻撃することも稀でなく服属性は低いと考えられる。一七八八年、シベリア総督 И.В. Дрозиの指示書に従って派遣された Д.И. Бочаров—Г.Г. Макайров 探検隊 (「Трунъ Святигора」号) は北米北西岸に沿い、未知の南東方向に航行し、Yakutat Bay から Lituya Bay まで来訪した。その海岸には Tlingit や Eyak の村と夏季居住地が存在していた。この時は、探検隊の人々と現地民の關係は極めて友好的であり、交易を行うのみならず Yakutat の Tlingit の首長とみなされた Muxax (Muxox) に服属の印として銅製のロシア帝国の紋章 (クレスト) や皇太子パーヴェルの肖像画が贈られる。服属か否かは別として Tlingit の「Land」に入り彼らと初めて接触し情報を得たこと及び Lituya Bay までの海岸地域を明らかにした点でこれはロシア人側には重大な意味を持つたと言える。ただしロシア側がこれに続いて直ちに Prince William Sound を出てその地に進出したわけではない。一七九一年シェーリホフ—ゴリーコフ会社に雇用され「北東アメリカ会社」の総支配人として Kodiak 島に到着した А.А. Бабанов の登場まで両者の關係の本格化は待たねばならない。バラノフと Tlingit の出会いは、一七九二年六月二日〜二二日の深夜 Nuchek 島 (Prince William Sound) での夜営中バラノフの狩猟団が突然後者の攻撃を受けた事件である。戦闘は夜明けまで続き、前者を救ったのは近くに停泊した「Трунъ Святигора」号から駆けつけた Г. Макайров に率いられた応援部隊だった。バラノフは Tlingit の軍事的強さを恐怖とともに実体験した。以後彼は鎖カタビラを常時着用する。しかし翌九三年初めて Yakutat へ E. Пыров 等四人のロシア人が指揮する大規模な狩猟団が派遣された。彼らは Yakutat Bay に到達したかは不明であるが、その近くや周辺の沿岸沿いに多数のラッコの存在する猟場を発見し、猟を行った。Kenai Bay や Prince William Sound 等従来の

猟場での毛皮資源の枯渇は深刻だったため、この新猟場発見はこの探検隊を送った「シェーリホフ—ゴリーコフの会社」、即ち支配人バラノフのその後の事業の方向を決定づける。バラノフは翌九四年に第二回の大狩猟団を Yakutat Bay へ派遣し、以後定期的に送る。それと並行してこの湾に Г.И. Илехов の指示に基きロシア人定住地「Норосичица (Сараповска)」建設も開始した。そしてラッコの新猟場を求め、探索のためアラスカ岸を南東に派遣されたシェーリホフ会社の船が九六年に Siska Bay とその周辺域に達し、多数のラッコの存在を確認する。九七年以降 Siska 方面への大狩猟団の派遣は恒例化し、大量の毛皮がシェーリホフ会社の基地 Kodiak 島に運ばれることとなる。ロシア領アメリカの中心となる東南アラスカのロシア領化の始まりである。しかしこれは Tlingit にとつてはその「Land」の権利の勝手な侵害と猟場荒しに外ならない。九四年以降 Yakutat Kwáan から Siska Kwáan へと続く東南アラスカ地域での Tlingit とロシア人 (事実上はバラノフを長とするシェーリホフ会社の狩猟団構成員—Aleut や Koniagi も含む) の關係は悪化の一途をたどる。にもかかわらずバラノフは会社の事業の中心をラッコの豊かな生息地が存在する Siska Bay 地域に移すべく九九年七月現 Old Siska の場所でロシア人定住地建設に着手した。しかし Muxaxirovская Kpenoerъ と呼ばれたこの新拠点は一八〇二年 Tlingit の攻撃で壊滅する。これはロシア—Tlingit 關係の破綻であり、同時に彼のロシア領形成プランの挫折である。

ロシア—アメリカ会社は遠いペテルブルクの本社でロシア領アメリカの統治を行わねばならず、一八〇二年の株主總會の決定に従い現地を統轄する「総アメリカ会社」を設立し、バラノフを正式に全権を有す総支配人に任じた。しかし同年前述のように現地は危機に陥るが、この任命がその打開に資することは無かった。

以上のような一七九〇年代末から一八〇〇年代初めのロシア領アメリカについてロシアの研究者の評価を大著「ロシア—アメリ

カ史」第一巻により考えたい。これは一七九八年を画期とする。<sup>18)</sup> 一七九八年には、Г.И.Шелихов のオホーツクへの出発と一七八六年の Лебедевца の Kodiak 島への登場から始まったロシア—アメリカ史の重要な段階は終わりつつあった」と。<sup>19)</sup> この時期に南東アラスカには新しいロシア人定住地が多数生まれ、Prince William Sound から Alexander Archipelago までの北米岸と海域が「ロシア人プロムイシュレンニクに指揮された巨大なバイダルカ船団」にとつて「主要な промысловые районы (狩猟地域) に変わった」こと、<sup>20)</sup> 即ち南東アラスカへのロシア領拡大とそれに伴う毛皮事業業績の大幅増が評価の根拠である。確かに九八年オホーツクにアメリカから到着したバラノフ派遣の二隻の船は莫大な量の毛皮を運んだ。「Феникс」号が五二万五九三七ルーブリ相当の毛皮を、「Препиригине Св.Александры」号が四三万一九三—ルーブリの毛皮を、またイルクーツク商人キセリョーフの会社も前年九七年に「Св.Зои́ма и Сава́рий」号で少ないが三万三三六〇ルーブリ相当の毛皮を同地に運んだ。<sup>21)</sup> この業績は当時ロシア領アメリカの毛皮事業が事実上バラノフ指揮下の旧シェーリホフ会社（七八年時にはイルクーツク商人の「合同アメリカ会社」）の独占への傾向を強めていたことも示す。

九八年頃をロシア領アメリカの新段階への画期とする見方のもう一つの根拠は「この「独占化」への転換である。それは制度的独占化ではなく、当該地域での毛皮事業が商人会社の競合状態から旧シェーリホフ会社の事実上の独占へと転換がこの時点で行われたことを意味する。その主因は Kenai Bay や Nuchek に拠点を有した最大の競争相手レーベジェフツィの撤退である。九〇年代前半彼らの活動は Kenai Bay や Prince William Sound にシェーリホフツィを凌いでいた。<sup>22)</sup> この会社の活動に関しては文献資料が少なく、シェーリホフ会社側の資料からの推測に頼らざるを得ない」との条件付であるが、撤退の直接因を経済的要因のみに求めることは難しい。彼らがライバルと同様狩猟場での毛皮獣の枯渇に苦しんだことは伺えるが、Nuchek

の要塞で Prince William Sound の Copper Delta への出口を押え、レーベジェフツィはシェーリホフツィの狩猟団が南東方面へ航行するのを妨害すると同時に Copper 川への進出で事業の衰退打破の行動を試みていた。しかし一七九七年六月 Copper 河口に設けられていた彼らのアルテリ (狩猟団) の拠点がこの川の中・上流域を支配する現地民 Ahna に襲撃され、このアルテリのレーベジェフツィが被害され、その上 Prince William Sound でも二十人以上のロシア人プロムイシュレンニクとそれに服属する現地民約百人が殺害された。<sup>23)</sup> この結果彼らは Константиновский реду́т (Nuchek) を放棄せざるを得なくなる。そしてこの要塞はシェーリホフツィが占拠し、支配人バラノフも夏に当地を訪れ後の処理を行った。また残っていたレーベジェフ会社のプロムイシュレンニクの多くがバラノフの支配下に移り、十九人だけが Коноватов を長として「Св.Георгий」号でオホーツクに去った。これによりバラノフは Prince William Sound の現地民 Chugach の一部から人質を取りバイダルカ船団に Chugach のバイダルカを組み入れるが、彼らの服属は不安定である。他方、翌九八年三月—四月には現地民 Tanaina が蜂起する。まず、彼らは Kenai 半島の対岸 Aleutian range の北にある Piamna 湖のレーベジェフ会社の要塞 (十二人のロシア人プロムイシュレンニキが守備) を襲つて殲滅し、続いて「Уюнак 湾岸の同アルテリを壊滅させた。<sup>24)</sup> さらに Kenai 半島のレーベジェフツィの最大の拠点 Пироговский реду́т を包囲した。確実に死の運命にあつたこの要塞の人々を救つたのは Kenai 半島の先端に位置するシェーリホフ会社の Александровский реду́т から駆けつけたシェーリホフツィの武装部隊 (В.И.Магатов 指揮) であり、包囲する現地民を駆逐する。この後この要塞は彼らが占拠し、Piamna 湖岸にも何人かのシェーリホフツィが残りに占拠した。そして五月にこの要塞のレーベジェフツィの大部分が「Св. Иоан Боростав」号でアラスカを去り、残存者は要塞の新人バラノフに仕えた。しかしこの蜂起の鎮静化後も Cook

Inlet 周辺現地民の不穏な動きは続き、七月にバラノフ自身が全定住地巡回の最初として「rebelious and mutinous people」を鎮圧すべく現地に向う。以上のようにレーベジェフ会社（正確には事業従事者と家族）のアラスカからの撤退の主因は現地民の攻撃にあり、背景にはロシア人狩猟団の進出に対する武力による現地民の対抗行動の活発化がある。ロシア人への敵意は Tlingit に限定されず、ロシア人と非・半服属現地民との関係の悪化は一七九〇年代末のロシア領アメリカに広がる。以上のように前述の南東アラスカ方面での新猟場獲得、獲得毛皮量の急拡大、そして毛皮事業の旧「シェーリホフ」会社（バラノフ指揮）による事実上の独占化の進行をロシアアメリカ史の新段階と決論づけるのは疑問である<sup>33</sup>。ロシア人―現地民関係から見るとこの時点のロシア領アメリカは毛皮猟の拡大及びロシア人定住地の拡大が促した両者間の摩擦が顕在化しつつある段階と言えよう。他方バラノフに対する航海士や毛皮猟師の不満や不服従の動き及び宣教師団の人々の反抗と現地民の労働拒否の動き等会社内部の秩序維持が困難となっていた。それは既に別稿で論じており<sup>34</sup>、ここでは、ロシア領アメリカには非・半服属現地民からの外的脅威のみならず内部の危機も存在したことを指摘しておく。それらはバラノフの重い負担であり、一八〇〇年に、Sitka での新定住地建設直後、当時上司の立場にあったウナラシカ島支配人 E.I. Japronov に辞任の意志を表明した理由は会社中央部への不満だけではない。従って、画期はロシア<sup>35</sup>―現地民関係の危機の頂点である一八〇二年の Tlingit の攻撃による Mikajirovskaya kpehoeb (Old Sitka) の壊滅と一八〇四年のロシア側の Sitka 奪回（ロシア側の Sitka Tlingit の要塞攻撃）に置かれるべきであろう。本稿は前者へのプロセスを具体的に追いロシア領アメリカの危機を検証するものである。

## 二、一七九九年―Sitka での定住地建設の開始

ロシア人の Sitka 進出（実際はシェーリホフ会社の進出）の契機は一七九六年 Yakutat にロシア人定住地―要塞建設 (Hobopocunick 又は Cranopecna) のため派遣した三隻の船の内「Open」号の船長 J. Shields<sup>36</sup> に出された Lituya Bay まで探査の指示である。彼は狩猟団を連れて Lituya Bay まで行き、そこで毛皮猟の狩猟団と別れるとさらに海岸沿いに南下。Chilkat Bay から Sitka 島に達し、島の西岸の Sitka Bay に投錨した。彼は Tlingit と接触するのみならず、後者との毛皮交易のため訪れるイギリス船やアメリカ船の存在を知り、毛皮獲得のため Tlingit と摩擦を起した「Arthur」号の船長 Henry Barber と面会した<sup>37</sup>。但しこの方面への最初の航海は前年バラノフの「Orna」号による Yakutat―Norfolk Sound までの航海及び同年の「Open」号による Port Bucarelli<sup>38</sup> までの航海であるが、翌九七年本格的調査と狩猟が始まる。前年の成功をうけ、春から夏にかけて四百艘の二人乗バイダルカ船団 (Aleut 狩猟団) がその年 Nean Poronov 指揮下 Sitka 方面に派遣され「Open」号 (J. Shields 指揮) が伴送した。これは成獣のラッコ皮だけで約二千枚に及ぶ大成果をあげ、その後バラノフの毛皮事業の中心が東南アラスカ、特に Sitka 地域に移る契機となる<sup>39</sup>。

さて、ロシア領アメリカの毛皮事業の主体が、元来の資金提供者である商人会社（本社）ではなく、現地で毛皮事業を実行するその現地会社や指揮する支配人個人であったことは、会社と事業現場との距離の遠さや運輸・通信手段の乏しさによる連絡の困難さから必然的に生じた事態である。九〇年代後半にシェーリホフ会社が毛皮事業で競合他社に対し圧倒的優位に立ったのも有能な支配人の力に帰することが多い。即ち一七九一年 Kodiak 島に到着した「北東アメリカ会社」支配人 A・A・バラノフである<sup>40</sup>。彼はシェーリホフ会社がイ

ルークツク商人の「合同会社」そして「合同アメリカ会社」と変わり、一七九九年には国家の保護・監督下の特権会社ロシアアメリカ会社に変わる中で一八一八年の総支配人職辞任まで事実上のロシア領アメリカの長であり続けた。一八〇二年、正式にアメリカのロシア領の総支配人に任じられた後はその統治者として君臨する。後世多くの「バラノフ伝」に史料を提供するフレーブニコフのバラノフの伝記(彼の私生活を含まず、仕事のみ)の中で著者は、一七九〇、一八一八年の間の動向について「これはバラノフが唯一人、自身のイニシアチブに基いて活動していた時期である」と記す。また、**Н.Н.Волховитинов** も **Г.И.Шелихов** や **Н.П.Резанов** と並んで彼を「真の帝国の建設者」と呼ぶ。近年でもバラノフへ賛辞を前述の **А.Р.Апретьев** が奉げている。

このように Yakutat から Sitka へのロシア毛皮事業の中心の移動とそれに伴うロシア人定住地・拠点の増大(これがアメリカのロシア領の拡大)は、一七九八年時点で、「アラスカの実事上の支配者になつて来た」とされる彼の事業と言つて誤りは無いであろう。

一七九七年と九八年に Kodiak 島から派遣されたシェーリホフ会社の Aleut 人バイダルカ船団―狩猟団は、Sitka 周辺での猟で約二千枚のラッコ皮を各々得た。この狩猟団の成功によりフレーブニコフによればバラノフは「何であれ」Sitka 島にロシア人定住地を建設することを決意する。確かに Yakutat Tlingit の研究者 **Frederica de Laguna** も、バラノフが当時 Yakutat プロジェクトの放棄を考えていたと推測し、明らかに、Sitka 即ち「in the heart of the Tlingit country」に拠点を建設する計画に比べ、より Yakutat 事業への彼の関心は薄くなり、彼が期待していたのは豊かな毛皮量を獲得している外国人商人の Sitka からの排除であると述べている。また、この建設がほぼ完成した一八〇〇年七月にラリオノフに「われわれの最良の狩猟が今この近くで行なわれていることを考えていただければあなたはこの地域が将来のためにいかに重要かわかりになるでしょ

う」と事業中心としての Sitka 地域の重要性を強調する。とは言え彼が Tlingit land でのこの建設を楽観視したわけではない。一七九八年夏に前述のように Kenei Bay では現地民の不穏な状態が再燃し、Ikana 河の定住地に脅威が迫る。事件そのものは彼の到着前に決着をみていたが、しかしバラノフは当地の **Николаевский рейд** を安全な場所でも再建するよう指示し、**Malakov** に管理を委ねた。次に **Prince William Sound** の **Nuchek** にも **Константиновский рейд** に渡り、これの他の場所への移設を指示し、信頼する副官 **Kykov** に管理を委ねる。以上のように Tlingit のみならず多数の現地民の中にロシア人への敵意が顕在化しており、彼は現地民に対する懸念を強めていた。そのため、常に **Cook Inlet** と **Prince William Sound** の要塞(計三ヶ所)を自ら巡回し、九八年のように問題が生じると Yakutat 行きすら中止して対応に追われた。しかし Yakutat Bay 地域以南を支配した Tlingit (ロシア人の呼称 **Korom**) は北米北西岸最大の人口を有し、強力な軍事力で周辺の他民族を圧倒し、ロシア人にとつても最も警戒すべき現地民であった。バラノフは Yakutat から Sitka 方面への数度にわたる航海を通じ彼らと接触する。早くも九五年の **Norfolk (Sitka) Sound** への最初の航海が彼らを知る機会となった。「バラノフは…コロシのいくつかの部族を知るようになっていた。彼は学んだ。これらの諸部族が多くの子供を持ち、強力で野蛮であることを。そして、バーター交易や商取引に引きつけられて彼らは勤勉な商人にすぐになった。彼らはヨーロッパ人の習慣を採用することができ、生まれつきの知力と能力によって早急に銃の射方を習得した。彼は彼らの領土を占拠するのは易しくはなく、彼らを服属させるには非常に大きな努力が必要であることを予知していた。」と、フレーブニコフは当時の彼の Tlingit 観を書く。しかし彼は Tlingit がどうあれ、国益優先を貫く態度を示す。大量の毛皮獣資源の存在が確認され且つ外国船による毛皮のバーターによる買い付けが進む Sitka 島から **Nootka** までを獲得することは「祖国に名誉をもたらすこと」

で「祖国のためわれわれは平和と命を犠牲にする義務がある」と会社への手紙で決意を述べた<sup>53)</sup>。だがそこは会社の中心 Kodiak 島から遠く、秋から冬―春の荒天により船団の難破も希ではない<sup>54)</sup>。一七九六年に建設された Yakutat 定住地が積替え港の役を果すが、Yakutat Tlingit-Eyak との関係悪化や、定住地の植民者の長 Половопный の拙劣な経営とプロムィシユレンニキの長 С.Ф.Дариков と前者の対立の深刻化による定住地内の混乱の結果、ここをロシア領の中心とする故シェーリホフの計画は現実性を失う。こうして「Sitka 島を Yakutat より東の Alexander Archipelago 地域における新拠点に選んだのはバラノフである<sup>55)</sup>」。Sitka 島周辺がラッコの豊庫だったからである。

Sitka でのロシア定住地 Михайловская крепость (Old Sitka) の建設から、それが Tlingit の攻撃で壊滅する事情に関する基本史料は K.T.Хлебников の「Ситка 島の占領についての歴史的概観、外国船についての情報とともに」(一八三一年)とその公刊版である。また前記の彼のバラノフ伝も補足史料の役をする。併わせてバラノフ関係の書簡も前者を検証するための必須の史料である。他方アメリカの史家 H.H.Bancroft のアラスカ史は一八八六年に書かれ、ロシア側に欠ける史料に基づく記述があり重要である。また近年の研究で史料的に重要なのは、現地民(本稿関係では Tlingit) 研究、特にその口承伝承の採取と記録である。その結果、ロシア―Tlingit 関係の事件の関係者や部族の特定及び現地民側の状況が解明され始めている<sup>56)</sup>。しかしこれらの史料には相互の不一致点や、記述の欠落と不明瞭な表現が見られる。一七九五―一八〇二までのプロセスに限っても、前記の Хлебников 等の重要な研究の中に不一致が見られる原因はここにあると考えられる<sup>57)</sup>。本稿も諸史料を比較検討しつつ大概確認し得る形でこのプロセスを記述したい。

一七九九年春バラノフはシトカでの新定住地―要塞建設計画に着手する。まず四月に Kodiak 島から五五〇艘の Aleut 人バ

イダールカ船団を派遣。続いて三隻の船が発航する。即ちまず「Св.Евфремина」号がドイツ人 Potash (Podgash) 指揮下要塞建設のための物資を積んで派遣される。指示は途中で Yakutat に立ち寄り続いて Port Bucarelli まで行き、その後 Sitka で他のグループと合流することである。次に「Северный Орёл」号が海軍士官で会社への勤務を命じられた Тагин<sup>58)</sup> 指揮下、後に新定住地の長に任じられる B.I.Мелведников 他八人の乗組員と共に派遣された。一八〇〇年のラリオノフへの手紙(①)によれば Тагин には、「Sitka を越え the Bokonello (Bucarelli) 湾と Bobrovaia (ラッコ) 湾そして Queen Charlotte 諸島までの海岸の調査」を Sitka での合流前の仕事として指示した<sup>59)</sup>。最後にバラノフ自身が「Orma」号で四月に出発した。人員不足を承知の上彼は急いだ。そこが近年の最良の猟場が存在する所であり、またイギリス人やアメリカ人が占領をねらっている地域であるとの彼の危機意識がその理由である<sup>60)</sup>。出発直後の彼の動きは Bancroft のみが記述する。それによれば約二〇〇艘のバイダールカ船団を同行し、Kenai 半島岸沿いに Prince William Sound に入った「Orma」号一行に、バラノフの最も信頼する副官 Кучков<sup>61)</sup> が一五〇艘のバイダールカ (Nuchek 島で越冬) を連れて合流。Prince William Sound を出て広大な Copper 河口から Controller Bay を過ぎた所で、五月二日バラノフ船団は不幸な事件に見舞われた。この事件はバラノフ自身の手紙を含めロシアの史料には全く見られない。従ってこの事件の真偽が問題となるが、結論を言えば近年ロシアの研究の間でもこれを認める方向にある<sup>62)</sup>。その理由の第一は、この事件の記述に際し H.Bancroft が、バラノフの友人 Delarov への書簡を引用していること。第二に F.de Laguna が、Chugach informant (八六才のマカリー、目撃者の孫<sup>63)</sup>) が一九三三年に「The Massacre at St.Elias Rock」の物語としてこれを語ったことを指摘する<sup>64)</sup>。以上のようにロシアの史料にはこの話は存在しないが、現地民の主謀者二名も特定する現地民側の史料がこの事件の存在を立証する

と考えられる。従って Baneroff の記述に沿う形で事件の概容を記したい。

五月二日 Cape Suckling (Kayak 島の対岸) 沖を通過する際に荒れた海に二人乗りバイダルルカ三十艘 (六十人) が呑まれた。バラノフは夜が近づくなかで、さらなる嵐の徴候を予見し、全バイダルルカに上陸を命じ、彼も同行した。闇の中で海岸までの距離を過小評価したため砂浜にやっと辿りついた時にはバイダルルカの人々 (多くは Aleut 人) は力尽きてすぐに砂浜で眠り込んだ。その直後「コロシ」の恐ろしい戦闘の叫びがひびき、バラノフ達は飛び起きた。「極めて大きな驚きが生来臆病な Aleut 人の間に広がった。彼らはいかなる抵抗も役にたためと考えるほどこの良く知る敵への恐怖で一杯になった。彼らの多くが森の中に逃げ込んだ。攻撃者の中に。彼らのバイダルルカに乗り海に出る代りに」ロシア側ではバラノフと二名のロシア人が闇の中に銃を撃ちまくり、敵人の現地人狩猟者も鳥撃銃で抵抗した。約一時間の戦い後、その Tlingits は森に引きあげた。敵は強力であり彼らを壊滅から救ったのはバラノフによれば敵味方を判別できぬ程の深い闇だった。殺害又は捕虜となり、この時二六人の Aleut が失われた。敵が去るや Aleut 語で生存して森や採木材に隠れていた Aleut を呼び集め、夜の明ける前にこの危険な海岸から出発した。海と海岸で多数の Aleut 人を失ったためバラノフ船団の力は著しく削がれた。この後のバラノフについて Baneroff は副官 Kycov が Prince William Sound に戻るよう助言したが、彼は前進し、五月二十五日に Sitka Sound に入ったと記す。この日付はラリオノフへの手紙<sup>①</sup>等で確認できる Sitka 到着日と異なりこの部分の信憑性は疑わしい。この事件は Tlingit の [Land] に拡大したロシア領アメリカでの非服属の Tlingit の脅威の重大性を示した。また、F. de Laguna によれば前記の Chugach informant は「この事件の主謀者を「Chilkat 川から Contoller Bay に来た Yakutat インディアン」の名を「Yakegna (Tlingit)」と Prince William Sound の

Gravina Bay から来た Chugach 名の Irquq」に特定した。<sup>②</sup>「これは Tlingit と Chugach のような伝統的敵でおそロシア人とその仲間に敵対して団結できることを示す」と彼女は見ている。

六月十二日バラノフ船団は Yakutat Bay に到着し翌十三日に港に入った。この Yakutat 寄港に関しては、Хлебников のバラノフ伝は数行のみでラリオノフへの手紙<sup>③</sup>が詳しい。<sup>④</sup>二年ぶりに来た当地で彼が見たのは混乱のみだった。Половинный<sup>⑤</sup>に対し植民者・狩猟者・現地民ほぼ全員が不平不満や反感を示し、彼と С.Ф. Ларионов<sup>⑥</sup>との対立は決定的だった。結局、両者を更迭し、Yakutat の植民者の長に Николай Мухин を任命せざるを得なかった。トラブルが収束した後六月三十日に Yakutat Bay をバラノフは出帆した。

七月七日、バラノフ指揮の「Ольга」号は Sitka Sound に到着した。<sup>⑦</sup>そこに投錨していたのは Тагин の「Опер」号のみであり、彼の不服従行動は続いていた。指示された調査を行っておらず、バラノフの「Опер」号乗船を威嚇により拒否した。Мельничников の説得にもかかわらず彼は「Опер」号から定住地建設に何の助力も与えない。そして八月に Sitka を去った。<sup>⑧</sup>この「Опер」号は Yakutat に寄港後 Kodiak 島に向うが、途中 Siuklia (Prince William Sound, Montague 島) 沖で難破。Тагин は助かるが Половинный と家族計五人溺死。約四千枚のラッコ皮も失われた。他方「Св.Екатерина」号はまもなく Sitka 以南の調査から戻った。この船の乗務員は十月一日に出帆するその時まで定住地や建設に助力した。ただ、最初に送った Aleut バイダルルカ船団だけは彼の到着の二日前に帰途に着き彼は会えなかった。

上陸後のバラノフの最初の仕事は定住地・要塞の建設地の選定と獲得だった。彼は急いで Tlingit のリーダーと会い、交渉に着手する。<sup>⑨</sup>roen と長老 (старшин) その他の指導的人々) に贈物をし、恐らく一方では優しく、他方では脅迫で彼は彼らに定住地のための場所を譲るよう強いた。彼らにあらゆる必要物資を送り届け、敵から防衛する

ことを約束しながら、当時 Sitka の権力は以下三人の有名な (Sitka Kwáan) toon の手にあつた。(一) Skautlelt (Shkawlyeyil) (二) Koukkan (Koox'áan) (三) Skatagech (Skayadahetch?)。

(一) と (三) は Raven moiety clan の Kiks'ádi の名、(二) はおそろい別の Raven moiety clan の Lukka'ádi の名である。これらの「当時の Sitka で最も影響力のある首長」との交渉の結果、Sitka Kwáan で最も勢力のある clan Kiks'ádi の伝統的に保有した土地の一片がロシア人に分与された。その中で Менделников とともに適地を六日間捜した結果前者が最初に推した場所を選定、十五日に木の伐採と建物の建設に着手する。建設の従事者数は不明確だが、ラリオーノフの手紙①によればロシア人約二十人と残された五十人の現地民、そして出帆前の「Св.Екатерина」号の乗組員であり、相対的に少数だった。ここに建設された定住地—要塞の名が「Крепость Св.Аркустрарица Михайла」(通称 Михайловская крепость) であり、今日この場所が「Old Sitka」と呼ばれる。

建設が順調に始まった二日後の十七日にバラローフは悲劇的事件の知らせを受ける。彼の到着前に帰還の途についた Aleut 狩猟団(船団)を襲った貝毒中毒による大量死である。彼らは出発の翌日 Khutshov Strait の小湾に夜営した。ここで狩猟者の Aleut や Chugach が黒貝を食べた直後に苦しみ出し、二時間で約一五人死亡。指揮者のロシア人達は彼らに火薬・タバコ・アンモニア水を飲ませ吐かせたが救げられたのは数人だった。さらに Yakutat を経て帰る途中に、死者はさらに一五人増え計一三五人となる。しかしこの狩猟団は Kodiak 島に幸ぐにも約一五〇〇枚のラッコ皮を持ち帰った。フレーブニコフによるとこの時友好的に Aleut を迎えたコロシは予期せぬ事件に驚き自分達の方法で彼らを救げようと努めた。しかし大量の死者を見て恐ろしくなり、ロシア人と Aleut がこの事を彼らのシャーマンの行為のせいにするのではないかと恐れ、後に森の中に一目散に逃げこんだ。他方この悲劇の知らせはバラローフをも不安にさ

せ、彼が建設に着手したこの場所の悪しき運命の恐ろしい予兆と思われた。

とは言え、新定住地建設は着実に進行した。冬までの建設状況についてはバラローフの言に従えば概ね以外の通りである。まず大型の багараи を建設。そこに船から物資すべてを搬入し、準備された食糧も保管。次に小さなそまつな баня。ぼろぼろのテントに居住していた彼は十月にここに移るが冬の間の大部分を煙や湿気と屋根からの雨もりに苦しんだ。続いて二階立ての казарма (兵舎)。縦八サージェン×横四サージェンで、二つの бродок (暗所) と保管倉庫が付いている。そして Aleut 用の ракимы (あるいは yurt) も建設された。その他作られたのは、仮設の鍛冶工房や台所、家畜小屋。そして定住地の堀も部分的に完成。バラローフは「Огъра」号とロシア人二五人と Aleut 人五五人をここに残し越冬しながら建設に従事した。越冬は容易ではなかった。一七九九年—一八〇〇年の冬は、天候が悪く十月から一月まで猛烈な嵐が間断無く襲った。壊血病が発生し、彼は部下達の健康を維持する方策を様々に行った。結局は天候が許す時に Aleut を猟に送り、彼らが獲ったアザラシやトド、そしてハリバットとタラが人々の健康回復の決め手となった。そして、この問題は三月にニシンが大量に獲れるようになったことで解決した。また困難はあったがこの定住地の周辺で Aleut は越冬中も約三百頭のラッコを獲ることができた。

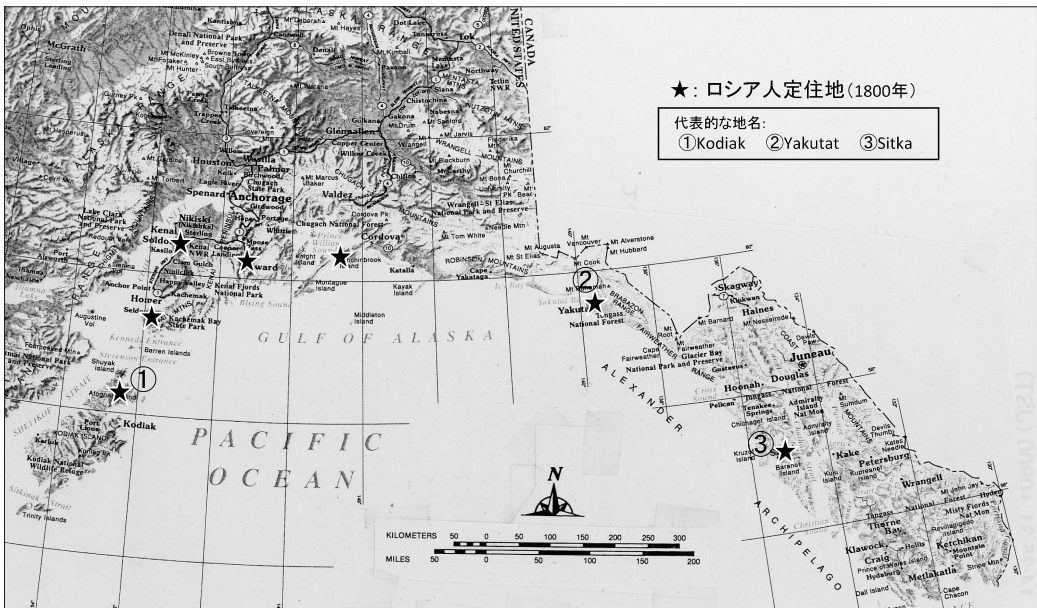
他方、同時期に当地を来訪し現地民と交易する外国船は五隻に及び、その船長や船乗りと交際したバラローフは危機感を前述のラリオーノフに詳細に書き送った。それに拠ると Sitka には一七九九年夏、彼の到着以前に二隻のヨーロッパ船が滞在。七月末にさらに一隻到着。翌一八〇〇年二月十五日ボストンから一隻到着。そして二月末頃と三月に二隻来訪し、Sitka 及びその隣接地域に投錨。バラローフの目の前で、Sitka だけで彼らは約二千枚のラッコ皮をバーター交易で Tlingit から獲得した。しかも「彼らは非常に高い価格を支払う。



私達と競争するのみならず相互に競争しながら。」しかも銃・弾薬筒・火薬・弾丸もラッコ皮との交換に与える。特に外国船の人々と相互に訪問したバラノフはポストン船への警戒を強めた。イギリス人に対するアメリカ・ポストン人の優位は、「ポストン人との競争できない」とイギリス人が言う程当地では明らかになりつつあった。即ちポストン人が当地の海岸を訪れ始めた時からイギリス人の交易は破滅した。実際この七月に到着したイギリス船は一隻だけで、残りはずべてポストン人の船だった。しかも後者は二〜三年毎に同じ船が来訪するので現地民とも知己であった。その上ポストン人は毛皮交易のみならず当地北米北西岸—カントニア—アメリカ合衆国間の三角貿易で莫大な利益をあげていた。バラノフは何よりも現地民への火器・火薬等の売却を危険視し、ポストン人に対しその禁止を要求するが、後者は「私達は商人であり一万二千海里以上利益を求めて航海している。誰もわれわれにこのような交易が禁止されると言ったことは無い」と彼の主張を無視し、「多くの者が恥知らずに私達の眼前で火薬・弾丸・銃・ピストル・ムスケット銃を交易していた」また、彼は、カノン砲も隣接する現地民の村に多数あることを耳にした。以上のように現地民の間で、外国人との毛皮交易による武装化が進みつつあるのは疑うことのできぬ事実と言える。そしてこれを背景にロシア人—Tlingit 関係にも変化が見えてくる。

三、一八〇〇年、バラノフの Sitka 出稼と Меридианов への指示書

Tlingit (Koonsh, Koojok) の対ロシア人感情の変化を冬の間バラノフは既に認めていた。冬頃には彼は前記の三人のシトカ力のト恩と親しくなっていた。特に彼が「Главный (首長)」とみなした Скаутлегт を厚遇し、自らの友と名づけ、贈物を与えた。さらに名譽の印として彼に銅製のロシアの紋章 (Щеп) と一八〇〇年三月



図：ロシア人定住地 (1800年)

二五日付の *Отрывки писем* (証明書) も与えた。その中にはロシア人により要塞用に占有された場所は *гоен* と彼の *пор (plan)* により自発的に有償で譲渡され、*гоен* は自己のロシアへの臣従を宣言したと書かれていた。この友好的取り決めにもかかわらず、*Tlingit* の間には不平不満があった。主因は他の *Kwáan* から *Sitka* を訪れていた *Tlingit* であり、*Sitka Kwáan* の住人をロシアの臣民になったことで嘲笑した。前者は後者を嘲笑して自身の自由を誇り、議論をおこさせ、ロシア人と *Aleut* に侮辱を加えようとした。これは「われわれはその近隣地域に住む現地民からの多くの侮辱、そして遠い村々から来た悪党達からさらに多くの侮辱に耐えねばならなかった。彼らはわれわれが永遠に居住するのを希望しなかった」との *Baranof* の言葉が立証している。冬の間の関係の変化が鮮明に現われるのが「*Пасха* 事件」である。*Пасха* (復活祭) の祝日の間に催される祝典に *гоен* を招待するため女性の通訳を彼らの村に派遣した。*Sitka* の *гоен* は全員従者を連れ要塞に現われたが、他地域からの来訪者は招待に応じなかったのみならず彼らは、この使者にひどい傷害を与えた。*Baranof* は祝宴は実施したが三日目に侮辱を与えた者を罰するため、*Baranof* は祝宴は実施したが三日目に侮辱を与えた者を罰ため

が、彼が現地民に対し抱く警戒心が強められたことは疑い得ない。その上彼らとのバーター交易は不調であり少量の毛皮しか得られず、高価格で支払うアメリカ人のため、極めて高い価格を支払わねばならなかった。

とは言え、彼は五月には *Kodiak* 島で「*Sitka* でわれわれは完全に満足すべき冬を過ごした。トラブルがなかったわけではないが当地の現地民を鎮め、服属させ、定住地を設置し、要塞を建設した」と部下に書いた。また *Sitka* 出発の少し前、四月七日付受取人不明の手紙でも「当地 (*Sitka*) ではすべてがうまく行っています。狩猟の見込みも非常に大きい」と述べ楽観的である。前記の二日に来航したボストン船四隻についても、乗組員との交流は上出来で、「われわれは彼らの客となり、それから彼らがわれわれの定住地の客となった。そしてわれわれは一緒にウオト力をたっぷり飲んだ。」また、現地民との関係も「行く途中どこにも危険は無い」とする。例外は *Chilkat* の *Tlingit* で、注意を喚起する。彼らには *Sitka* でもあまり会ったことはないが届くうわさは敵対的であると。他方彼は、「*Kodiak* 行を迫られてもいた。「多くの状況が遅延には反対である」と、一度は三月中旬頃に予定された *Kodiak* 行を四月中に決行する決意を「われわれは今月にもどうしても出発するつもりです。失敗せずに」と語った。しかし *Sitka* の状況への不安は残している。定住地建設の進行状況を誇らしげに記しながら、現地民との間に重大な不和は無いが、あれこれについて非常に多くの不平・不満があることを認める。そして「われわれは忍耐強くすべてを克服した。恒常的に用心し…いかなる敵対的行為にも備えをしている」と。

四月二二日、*Baranof* は「*Oryga*」号で *Sitka* を出帆し *Kodiak* 島に向った。五月一日に *Prince William Sound* で狩猟団に会い手紙等を受け取り、四日にそこを立ち五日夕方に *Kodiak* に到着した。彼は出発を前にして、新要塞の長 (*начальник*) に *Василий П. Мелвельников* を任命し、彼に指示書 (*наставление*) を手渡し

た。これは前文で Kodiak に出発せざる得ないので、彼を長に任じ、当地に残るすべての人々を彼の指揮と管理に委ね、同時に生産業務の最高指揮権を譲るとバラノフからの権限移譲を記す。続いて、Melvelnikov に対し七章に分けて現状・問題点・対応策・今後の施策等々極めて細かい指示・あるいは助言が述べられる。特に会社の外部と内部双方の現地人、即ち Tlingit と Aleut に関する助言と指示が多く、それが彼の最大の懸念材料と考えてよい。従ってこれに基づき、出発時点での Sitka 定住地―要塞と業務への彼の懸念を検討したい。

この指示書の七章の内容は概ね以下の通りである。第一章 Sitka 地域の現地民への対応。第二章継続中の定住地建設に関する指示と助言、第三章定住地―要塞で働く男の秩序と服従の維持。「怠惰な者や不注意な者、より正しく言えば全体の安全と警備を軽視する者には過失と罪に応じて罰金を課す」ことを許すこと。第四章長老 (староста) Навасин への適切な監督が命じられる。「経済の全部門で良い経営状態 (хозяйство) と秩序が保たれるように」と。次に記されるのは食糧の損傷無き保管と不足無い配給、さらには将来のための備蓄用食糧への考慮、狩猟で獲得される獲物 (毛皮) の適切な場所での保存、Tlingit とのバーター交易や狩猟団員 (наровщик) から受け取る獲物代の支払いは Melvelnikov の助言の下で行われるべきこと等、定住地の通常の業務・運営に関する具体的指示である。そして Навасин に「任せられた職務の適切な遂行を思い出させるべきである。少なくとも当地の Tlingit やその他の諸民族 (народами) も、すべての狩猟団員、すべての каюр と каюрка も怒声や乱暴にではなくできる限りヒューマンに、礼儀正しく親切に扱うべき」ことを。そして (全業務の) 毎日の記録作成や当然与えられるべき人にくずぐずせず分配することが最後に書かれる。これは定住地の日常業務の現場監督者への指導監督要領と言える内容だが、それは当地の現状の問題点も伺わせる。特に外部、内部を問わぬ現地民に対するロシア側

現場監督者の接し方の修正をバラノフは指示したと言える。第五章は「残留した狩猟団員 (наровщик) を礼儀正しく世話をし、天候のため自分の食糧を取ることができない場合には食糧供給により彼らを助けるべき」の文で始まり、Aleut 狩猟団員の処遇・扱い方がテーマである。まず重要とされるのは、常に現地人の中から Почётных (高貴な人) を区別すること。即ち「祝祭日には彼ら (Почётные) をロシア人と時折同じテーブルにつかせるべき」バラノフはここで「Почётные」の具体的名前を示す。以下は前記に基き特定された名前である。(a) the Kamai Toion Gavril (a) Toion Efim Chernov (c) Toion Aligiaga (Filipp), Karluk Toion の息子 (b) Alutsumaq (Filipp), Chiniak zakazchik の息子 (e) Atyl (Gavril) Poiapolitskii (おそらく現在の Ayakulik)。(c) (d) (e) は Kodiak 島の roen であり (a) はアラスカ半島であるが、(c) (e) と (a) の居住地は Sherikof Strait を隔って向かい合っている。従って彼らが狩猟団構成員や現地民労働者 Kaur と Kaurka の中核を成す Aleut や Koniasg の roen であり、彼らが狩猟やその他の事業の実行者達の直接の組織者と考えられる。おそらく少数のロシア人が彼らを通じて現地人労働者に事業を遂行させたのが実態であろう。即ち現地人労働者は彼らの旧来の内部の社会関係に基づく集団で働いたと考えられる。バラノフがこの章の最初に、Почётные をロシア人と同等に処遇し、その集団内での高い地位を尊重するように強く命じる理由はこの点にある。彼は Почётные の名をあげた後に、「これらすべて人の処遇について厳命する。「博愛心に富む思いやりを持ち世話をすべきであり、決して誰にも不必要に侮辱したり、必要なしに労働や仕事、あるいは奉仕を(彼らの同意なしに)無償で課すべきではない」さらに必要な場合でも「彼らを優しく説得すべきである。荒っぽいものしりを伴う厳しい態度によるよりも。」そして Melvelnikov に対して命じる。「そうであるからにはもはや誰にも彼らを殴る権利はない。特に理由無しには。また理由があっても君が検討すること無

しに課金したりあるいは罰する権利は誰にも無い」と。<sup>⑧</sup>これに続く部分は現地民労働者へ行うべき指示である。自分用の食糧貯蔵や河川での漁の他に天候の長期安定期に、Урвановの指揮下ラッコ猟への全員派遣が指示される。またこの際狩猟員の獲った獲物の会計処理方法も定める。担当は前記の Нарвагин であり、彼に受け取った獲物を毎日の記録簿に書き入れさせる。会社が負債を負う者には受け取り書が発行され、新獲得物はこれに書き加えられ、分配を受けた場合も同様である。会社に負債が残る者は差し引かれ、清算が行われ、再度計算される。<sup>⑨</sup>以上は狩猟員を含む現地労働者に関する指示である。そしてこの章の後半は Kodiak 島から到着する「Главная」狩猟団 (нартия) への対応である。基本は当地の狩猟員全員が加わる単一の狩猟団の形成と共同の狩猟事業実施である。狩猟場でのリーダーには日常の狩猟で知識を有す当地居留の現地民 топон が当てられる。ここで前記の Почённые の名が現われる。即ち、南の猟場に於て Katmai топон Ерим (b) の可能性有、<sup>⑩</sup> Нунаккулук 及び Кумьк、そして Sitka 近くの西方面と北方面には前記の (d) (c) (e) の三人が当てられる。さらに Kodiak からの狩猟団の長に対する獲物を取る最良の方法の助言も。その他、この狩猟団の獲得した獲物すべて(当地で獲れた物と Yakutat から Sitka までの航海中に獲れた物等)の定住地への運搬、その毛皮の乾燥と湿気と損傷から守られる乾燥した適切な場所での保管。そして狩猟団の船が Kodiak に向けて出発する際に Sitka やその他地域の Tlingit から バーター 交易で得た毛皮や前回の Kodiak 帰還狩猟団に加わらず越冬した狩猟団員の滞在中の獲物(毛皮)と一緒にそれを積み八月中に狩猟団とともに送り出すこと等指示は具体的な点に及ぶ。<sup>⑪</sup>以上のようにロシアの毛皮猟の実行部隊である狩猟団の実際のリーダーは Aleut 等の現地民の複数の長 топон (тоен) であり、巨大な数のバイタルルカ船団の長期間・長距離の旅行も組織的狩猟活動も彼らに依存する事実をこれは示す。従って彼らの処遇改善は第一に配慮すべき事項だった。

第六章は Sitka に来港するイギリス船・ボストン (アメリカ) 船及びその他の外国船への対応である。特徴的な点は バラーノフ の他の手紙に見える毛皮交易におけるライバルあるいは火器等を現地民に売却する外国人は問題とされぬことである。最も警戒するのはアメリカ人の間での伝染性の病気、特にペストの流行である。従ってアメリカ人と実際に距離を保つことを求める。<sup>⑫</sup>次にフランス船への対応については、ロシアの事情も他のヨーロッパ諸宮廷との事件についても長期間情報を持たないとの前提で「フランス船を見たら祖国の敵と思うべき」とするが、森に逃げることも船を島々の後に遠ざける自己防衛も可と真剣な危機感は見られない。最後はイギリス人船長 Bricks (わかれの知人・カントンからの) が来訪した場合、できる限りのもてなしを行うよう指示するとともに彼からヨーロッパに関係することやロシア-中国関係の状態等の情報を聴取することを求める。<sup>⑬</sup>後者は Нарвагин に書き留めさせ、当地で バラーノフ に手渡すか、Kodiak 島に船で送ることを命じる。おそらく国際情勢が、毛皮の国際取引に与える影響を バラーノフ は懸念したのであろう。以上来航外国船への バラーノフ の態度はここでは敵対的では無いと確認できる。第七章は食糧の備蓄をテーマとし、多くの備蓄の必要性和その具体的方法を詳細に示す。<sup>⑭</sup>特に、備蓄の方法として現地民のやり方に従って drokta (乾燥又は燻製の魚片・ユッコラ) での備蓄を重視。その製造を細かく奨励する。その中には肉、魚を燻製にする場所として現地民 Tlingit と同様に半地下式の家 Barabora を以前現地民のそれがあつた場所に建築すべきとする指示や Tlingit と同じ方法でのその製造を求める旨も含まれる。<sup>⑮</sup>特に銀ザケを rokora の一種 kachemaze に加工し食糧として保存すべく、越冬中に Aleut 狩猟団員に自分達のための kachemaze 作りの仕事を強制している。<sup>⑯</sup>ともあれ、食糧備蓄は、バラーノフ の認識では定住地の重要な問題であり、将来何が起るか分からないが故に、充分過剰な量の食糧の備蓄を持つことは絶対であり、あらゆる可能な努力がその準備に払われねばならなかった。<sup>⑰</sup>この

指示書の最後は、狩猟団員や現地人労働者の処遇に関する第五章の一部及び第六章の船長 Bricks の件のくり返して終る。<sup>⑧</sup>

内部の現地人への対応の指示は以上の通りである。最後に外部の現地人 Tlingit に関する彼の指示の検討に移る。これは第一章のテーマであり、彼がまず Медведников に伝えようとした事項である。第一章は現状認識から始まる。問題は食糧供給であり、その不足は現在は予想されず、夏から秋までは生じることは無いと述べるがその条件は「もし当地の住民あるいは外部の者の側で何の妨害あるいは敵対的企てが起こらない」ことである。即ち定住地の安定は当地に居住あるいは来訪する Tlingit の動向に左右されることはこの時に指摘されていた。そして「もしわれわれの側、即ちロシア人あるいは狩猟団員が悔しさを感じる理由を与えぬなら」この事態は生じないと予測できるとして、バラノフはロシア側が現状では弱体との認識に基づき、彼らから離れ、これを避けるべきことを厳命する。<sup>⑨</sup>そしてロシア人に自制を求め、現地民の無知等から生じるつまらぬ腹立ちには我慢すべきと指示。同時にロシア人と狩猟団員に対し、「粗野な自身の偏見をできる限り抑え平和的行為に留め、そうでないと生じる結果、それは越冬中一度ならず小さな事に関して出会っているが、考えるよう」くり返し言うことも指示。<sup>⑩</sup>そしてバラノフは交流の前提として持つべき Tlingit 観を示す。「これらの民族は世界の創造以来自然的自由を享受し、外部の意志のことを考えたりすることは一度も無く、それを喜ばせようとは考えない。」<sup>⑪</sup>そこでわずかな悔しいことにも報復せずにいられない。これは冬期に彼が実体験で学んだこととされ、Медведников に対し重要なこととして考えに入れて置くべきと命じる。他方、彼らの食欲に自己利益を追う性向や忘恩の性向も記憶にとどめ、「わずかな物でも彼らから受けとってはならない。交易せずに、何よりも代償を払わずには。そして八方手をつくして横領は抑えられねばならず、誰にも許されないと彼に強調する。<sup>⑫</sup>以上がバラノフが与えた Tlingit との関係でのロシア側の対応の原則で

ある。次にこの章の中頃から後半は具体的対応方法である。詳細であるが本稿では重要点にのみ言及する。第一は交際対象の現地民の選別。以下の топон の名が追加してあげられる。топон Хааров と彼の兄弟、新選出の топон Михайло (Shk'awulveil Kiks'ádi のリーダーをロシア人が呼んだ名前、ロシアの史料では一般に Skautfelt) 及びわれわれの元の топон Схагек (Tlingit の音声から聞き取った名。おそらく Sxadeis) と兄弟、その他以下の Почетные 人々。Kekur Bay (場所未確定) の Kuke (Krepanov 島の Tlingit 村、ロシア人のラッコ猟場へのルート上にある) の シャーマンと義理の父、топон Михайло の最も近い湾の豊かでもてなし好きの甥とその兄弟 Шедровитым (Pockmarked man) 、Kodiak に行くことを望む少年の父親。事が起った場合に彼らに食物を提供すべきと書かれており、概ねロシア側にとつて交際の実績があり、現地民との仲介が期待できる地元の clan の有力な Tlingit と考えられる。第二はもてなしの方法である。原則は飲食物を主体とする「気まえ良い」<sup>⑬</sup> 供応である。これは現地人のポトラッチのような慣習の尊重であり「彼ら自身が自分の家でロシア人やコーデイヤク人を気まえ良く満足させるように」<sup>⑭</sup> 供応せねばならない。その他、船が交易商品とともに来航した場合は小さな贈物を少量ずつしばしば与える。注目すべきは、топон Схагек Тогрои (Tlingit の発音では sxaadeis) に特別な贈物を、秋に贈られた二頭のラッコの代償に与えねばならぬとの指示に「われわれのしかも多くの贈物が彼の下に行っていることを考慮せずに」の文が付くことである。<sup>⑮</sup>そして理由として「私が見返りに贈物をする約束をしたのは、われわれによる彼らの土地の占拠にはわれわれの側から多くの感謝の気持を表わすことを必要とすると判断して、欲張りの強欲さを満足させるために」と述べる。これは定住地の土地への植民の許可をこの топон がバラノフに与えたとの解釈の妥当性を示す。また、代償としての贈物は Tlingit の習慣であり、ロシア人もそれに従ったことは明らかである。第三は、Tlingit への警戒である。

特に彼らが多数で訪れる場合は最大限の用心を求める。中でも「腹黒い傲慢なТойном Рубцов」(Tlingit nameは不明。ロシア人の渾名。英訳Scar)が率いるКонотон(Kaagwaantaan, Eagle moity in Sitka)の人々かあるいは遠い村々から来た人々が来訪者に含まれる場合は最大の用心を払うこと。また多数で来訪し、ダンスを行う場合、兵舎の建物内に入ることは不許可。少数で来ても建物内でのダンスは許さず、外の兵舎前で行うなら許す。さらに数の多少にかかわらず、秘密の監視を行い、彼らのカヌーの中あるいは衣服の下に火器や武器が隠されていることが発見されたら、前述のТойном以外全員即刻兵舎から追いだすこと等。この強い警戒心は武器装備や訓練に反映する。バラノフはTlingitの攻撃に対する防衛として、見張り塔への大カノン砲の配備、兵舎への一角砲と大カノン砲の配備、銃の整備と火薬や弾薬筒の補充と言う装備面のみならず、兵舎への見張りの配置や危険時に見張りの銃発射を合図に兵舎内の人々が全員外へ出るシステム等定住地防衛に意を用いる。この定住地防衛への彼の考えは第二章で兵舎等の今後建築する建物のプラン等への指示にさらに具体的に示されている。

冬期に友好的だったTlingitの態度の変化を感じ、同時来航する外国船によるTlingitへの武器供与の続行を知りながらも、定住地を「経験豊かで忠実であり、困難を恐れず勇敢な人間」Мелвениковに託し長大なる指示書の実行を期待し、彼はKodiak島へ「Olyra」号で出発した。

#### 四、一八〇一年から一八〇二年春

五月初に帰島時のKodiakには問題が山積していた。まず冬期Kodiak島ではバラノフの不在が促進した秩序の混乱である。「Opai」号で難破したが帰島していた政府の士官—航海士Таминと何人かのバラノフに敵対する人々の反バラノフの活動はKodiak

島現地民にも影響を拡大し、不満を広め、後者を暴動にまで至らしめた。やと三月に副官КусковがNuchekより戻り、この争いを大概鎮めるのに成功した。そして、現地民を集め狩猟団も派遣できた。しかし反バラノフの動きはバラノフ帰還後も続き、それは修道士等聖職者とバラノフの対立に拡大して行く。この会社の中心地の混乱のみならずKenai Bay (Cook Inlet) 周辺地域では、現地人がDiamna 河畔の定住地で三人のロシア人を殺害し、さらに居住するKonigerも含め全員の掃蕩を企てる事件が発生。この反乱は発覚し、拘束され罪を自白した反乱者はKodiak島に移送されたがこの地域の状況の悪化は明らかであり、バラノフが自身で事態改善のため、八月後半その地の新Николаевская крепостьとIkathaに二年ぶりに赴いた。帰途Александровская крепостьからPrince William Soundに回りそこに保管された毛皮や難破船の鉄・ロープを積んで九月半ばにKodiakに帰還した。問題の最後はオホーツクからの支援物資を積んだ「Феникс」号の難破(一七九九)が確実となり、物資補給の期待が断たれ深刻な物資不足に見舞われたことである。バラノフは当時多くの船を難破で失いオホーツクに物資輸送船を送ることができなかつた。近い将来すべての物資の欠乏が生じると考え、彼はЛарионовに緊急事態を知らせ、援助を頼むため使者Порогичин等をUnalashkaにバイダールカで送った。しかしこの返答は翌年八月以降であり物資の補給は得られない。以上のような解決困難な問題の存在にもかかわらず、会社の事業は顕著な成功を収めていた。即ちラッコ猟の成果は一八〇〇年の間にSitka狩猟団だけで毛皮二六〇〇枚、全コロニーで三五〇〇枚に及んだ。事実上Sitka地域が既に会社の事業の支柱となっていた。

一八〇〇〜一八〇一年の冬の間Kodiak島の反バラノフ派の聖職者と政府雇員の動きは激化し、島の現地民の間にバラノフ(会社)への反抗や蜂起を働きかけた。結果的に多くの現地民がSitkaへの狩猟団参加や会社の仕事を拒否するようになる。この不服

従・反乱は他の島々にも拡大し、数的に少ないロシア人は追い詰められつつあった。その上一八〇一年五月以降「島民の独立と古い慣習に従って生きる自由」を約束し、現地民の反乱に味方する聖職者との対立は深刻化し、バラノフは教会に行かなくなる。この影響は直接的では無いが、前者の現地民の反会社の行動は致命的である。バラノフはこの危機への対応のため、独断で、去ろうとする Toion の逮捕を命じた。逮捕できたのは Tugidak 島の Toion 唯一人だったが他の Toion にも影響し、後者は団結することも、会社の仕事の拒否も止めた。その後バラノフは、人質を前者の村のみならずその島の南部の村々にも命じた。こうして Kodiak 地域の現地民を完全に鎮めたかは不明だが会社の事業は継続できた。一八〇一年春に И.А.Кукцов の指揮下四七〇艘の Aleut バイタルカ船団と「Св.Екатерина」号から成る狩猟団 (Главная партия) が、以前と同様に Sitka 地域に派遣された。この年の成果は特に巨大であった。九月頃戻ったこの船は、この狩猟団と Sitka 狩猟団の獲物と Михайловская крепость (Sitka 定住地) での Tlingit との交易による獲得物、合わせて約五千枚のラッコ皮を積んでいた。

物資供給の面ではバラノフに幸運が訪れた。当時彼には狩猟団員に獲った毛皮代として支払うべき物資もロシア人被雇用者へのそれも完全に無かった。四月二四日、ニューヨークからの最初のアメリカ船「Enterprise」号が Kodiak 島に來航した。船長は James Scott であり、Sitka に立ち寄り、Медведников から Kodiak 島直行とそこで自分の積荷を毛皮と交換するようにとの助言を受けていた。バラノフはこのアメリカ人と取引し、彼から食糧と必要不可欠な物資を大量に(一万二千ルーブリ相当)得た。代金は二千枚の黒と赤のキツネの毛皮であった。このようなバーター取引の権限は法的には彼には無いが、前年七月に物資供給を求めて Unalaska に送った者から何の知らせも届かぬ状況では、現状の救済のため彼は決断せざる得なかった。この結果当面の物資不足は解消された。しかし

五月九日付 Malakov からの手紙が、逃亡 Tanaina と Chugach による Константиновская крепость への攻撃の懸念を伝えたため、彼は Kenai Bay からそこ (Nuchek) への巡回を実施し、帰島は九月二八日だった。翌一八〇二年四月バラノフは再び Кукцов 指揮下四五〇艘のバイタルカの Aleut 狩猟団を前年と同じルートで Sitka 地域に派遣した。五月には советник の称号を有すデンマーク人 И.И.Баннер (Banner) が Unalaska からバイタルカで Kodiak に到着した。彼はバラノフに会社が特権を賦与され、皇帝の庇護下に入り、バラノフが株主に加えられたこと及びアレクサンドル一世即位の件を伝えただけでなく、前皇帝パーヴェル一世から彼の功績に対して賜与された聖ウラジーミル勲章のリボン付名入りの金メダルを手渡した。バラノフは熱狂的に喜び、この祝いの日のため羊一頭を解体し、また当地の学校にも千ルーブリの寄付をした。彼にとつて最良の日であった。続いて、六月二日彼は「Св.Екатерина」号に補給物資を乗せ、Yakutat と Sitka に派遣した。七月には Баннер が「Ольга」号 (Кашеваров 指揮) で Kodiak 島を出帆し、Unalaska に向った。他方、敵対的なヨーロッパ諸国の攻撃をバラノフは心配し、それを恐れ Sitka 行きを止めていた。

しかし同月二四日イギリス船「Unicorn」号が到来し、その船長 Barber が伝えたのは Sitka の要塞が Tlingit に破壊され、救出者をこの船に乗せているとの知らせだった。その時バラノフは Adognak 島とその他のいくつかの島への旅の途中だったが、この知らせを得て急いで戻ってきた。これらの不幸で恐ろしい事件の目撃者は語った。Tlingit の大軍が真昼にこの要塞を攻撃した。彼らはロシア人をもだえ苦しませて殺害し、倉庫のラッコの毛皮を強奪し、定住地と建設中の小船を灰じんに帰させた。六月、バラノフ不在中に Михайловская крепость は焼亡し、姿を消していたのである。

この事件に関してそれに至る過程を、主にロシア領アメリカ形成史、即ち後にその中核となる東南アラスカへのロシア人進出過程の面

から本稿は描いた。他方でそれは Tlingit 「Land」へのロシア人の進出史であり、従って両者の関係の重要性を軽視するものではない。この事件はその破綻であるから当然である。しかしこの破綻の原因をロシア側の史料から探すのは困難である。ロシア人狩猟団の Tlingit の猟場でのラッコの乱獲の問題は確かにある。この直前の一八〇〇年—一八〇一年には会社のラッコ猟の中心は Sitka 地域に移りその毛皮猟の成果は巨大になっていたからである。Yakutat でロシア人—Tlingit 関係が一七九四年以降悪化する主因がロシア人の Tlingit-Bayak の猟場での毛皮猟にあると考えるのは根拠がある。しかし、一八〇一年の Sitka への狩猟団を率いた И.Кысков は Хлебников にその時の猟場での状況を語っている。「Колони (Tlingit) がすべての場所で…ラッコがより多くいる湾や入江を自身から進んで教えようと申し出た。場所から場所へ彼らが狩猟団を導き、自分の隣人に推薦し…」Tlingit が案内した大量にラッコが存在する狭い湾でアレウト人が喜んで猟をするのを見ながら「Колони はうらやむこと無しに Aleut の猟でのすばしこさや技術の巧さに感嘆していた<sup>(1)</sup>」。Sitka 地域の Tlingit がロシア狩猟団に協力的と見える発言であるがこれの解釈には Tlingit の側からの見方が必要である。それはこの事件の解釈全体に当てはまる。しかしこの時点のロシア領アメリカにおけるロシア人支配の脆弱性とロシア領としての統治システムの不在に帰因する秩序の崩壊傾向がこの事件の背景にあることを忘れてはならない。「ロシア—アメリカ会社」成立時ロシア領アメリカは、現実には国家の統治システムの外にあった。当地では圧倒的多数の現地人に対し、ロシア人の数は極めて少数であり人員不足は慢性的に嘆かれている。その上古参の航海士の病気や難船による死は必要な航海を困難にした。物資不足はロシア側の最大の問題であり、食糧供給もしばしば危機的状態になった。現地民との関係維持に必要な、交易・贈与・対価用の物資も前述のように欠乏する場合も希ではない。軍事力では、火器と統制のとれた行動で現地民に対し優位を保ってきたロシア側は、人口が

多く、個別の戦闘能力と組織的軍事行動力の双方を有する Tlingit に直面して優位性を失いつつあった。後者が外国人から交易により手に入れた銃・火薬・弾丸等の火器での武装化を強めたことによりそれは一層進んだ。これらを背景に一七九〇年代末から反ロシア人の動きは Tlingit 「Land」のみならず、Kenai Bay の Tanaina や Prince William Sound の Chugach として一八〇〇年には会社の拠点のある Kodiak 島地域の Komagi にまで広がる。これを鎮めるため支配人自身が船で問題の場所を巡回せねばならなかった。同時に前述のように Kodiak の会社の拠点も反バラーノフの動きで秩序が不安定化していた。この状況の中でロシア—アメリカ会社設立時のロシア領アメリカは毛皮猟の拠点として建設された定住地のネットワークの総体であり、レーベジェフ—ラストキン会社雇員の撤退後はシェーリホフ会社支配人バラーノフが事実上単独で事業と定住地を現地人との「良好な関係」を維持することにより「統治」していた。他方ロシア政府の指示・支援は影が薄く、一七九四年この地を訪れたヴァンクラーヴァー隊のヴァンクラーヴァーが当地でのロシア政府の存在を否定したが、その状況が続いていたと言える。しかし一八〇二年の Sitka の要塞壊滅<sup>(2)</sup>は、この状態でのロシア領アメリカ存続の難しさを明らかにした。

#### 註

- (1) 正式名称 [Подъ Высочайшия Ею Императорского Величества покровительством Россіско-Американская Компанія]  
現在の通称は [Россіско-Американская Компанія] 略称は PAK  
英語の通称は [Russian American Company]  
日本語の通称は「ロシア—アメリカ会社」
- (2) Курильские острова (クリル諸島)を含む。本稿の地名は原則現地名(英語)を用いる。ロシア語史料からの引用で歴史的地名として必要な場合は例外である。
- (3) С.Г.Арджанов и В.В.Трепавлов (от.ред.), Национальные



- окраины Российской Империи. М.: 1988. стр. 91-93.
- (4) 一七九四年のヴァンクーヴァー指揮下のイギリス探検隊のアラスカ岸を含む北米北西岸調査は、この地域でのイギリスの領有権主張の可能性を探る意味でロシア人の進出状況を詳しく調べている。即ちロシア領アメリカの国際的認知は十八世紀末以降である。
- この探検隊の活動については拙書『ジョージ・ヴァンクーヴァー指揮下のイギリス探検航海隊の見た北米アラスカ岸のロシア人とネイティヴィンディアン』『群馬県立女子大学紀要』第二十七号、平成十八年、参照
- (5) 原住諸民族は英語では native、ロシア語では Местное население である。
- 本稿ではこれを現地民と呼ぶこととする。
- (6) この研究動向については拙書「ロシア人のヤクタート行—一七九四年—」『群馬県立女子大学紀要』第三十二号、平成二十三年、八五頁—八六頁、参照
- (7) 近年 Tlingit 側の視点から一八〇二年と一八〇四年の Sitka でのロシア—Tlingit の戦いを中心にロシア人のアラスカ進出を再検討する研究書—史料集が出された。
- Nora M. Dauenhauer, Richard Dauenhauer & Lydia T. Black(eds), *Anooshi Lingit Anni Ka. Russians in Tlingit America*, Seattle & Juneau, 2008.
- (8) A. B. Гринёв, *Индейцы Тлинкиты в период Русской Америки* (1741-1867 гг.), Новосибирск, 1991. стр. 98-99.
- (9) Chugach エスキモー。言語分類では現在 Pacific Gulf Yupik である。しかしロシア領アメリカ時代の呼称は Чугачи, Prince William Sound は Чугачский Залив と呼ばれた。従って本稿は元の英語名 Chugach と表記する。
- (10) Гринёв, указ. соч., стр. 98.
- (11) Kodiak エスキモー。Kodiak 島とその周辺の島々の原住民族。ロシア領アメリカ時代の呼称 Коняги (複数)。本稿ではこの英語表記 Konagi を用いる。
- また、隣接する地域の原住民族のロシア名 Алеуты も英語名 Aleut を用いる。
- (12) 拙書「ロシア人が始めてコロシ (トゥリンギット) に接した時」『群馬県立女子大学紀要』第二十六号、平成十七年、参照
- (13) Frederica de Laguna によれば Илхан は Yakutat Kwáan の toion (toen) ではなく、当時おそろしく交易のため Yakutat に来ていた極めて高い地位の Chilkat の toion。現地民は決して彼がこのことにより女帝に服属したとは考えていないことは確か。
- Frederica de Laguna, *Under Mount Saint Elias: the history and culture of the Yakutat Tlingit*, part 1, City of Washington, 1972, p. 137.
- (14) シェーリホフ—ゴリーコフ会社のアメリカの事業会社は三社である。
- 「北東アメリカ会社」「ウナラシカ会社」「先駆者 (Перелаченская) 会社」
- (15) Александр Андреевич Баранов (一七四六一—一八一九)。身分は карпопольский мещанин。
- ロシア領アメリカの建設者と言って良い。本稿ではバラノフと表記。
- (16) この第一回の Yakutat への狩猟団派遣について  
拙書「ロシア人のヤクタート行—一七九四年—」九四頁—九五頁
- (17) 一八〇二年の株主総会の決定による指令書でバラノフに「アメリカと島々にある定住地 (колоний) 全ての総支配人」として全権が与えられた。
- この指令書について П. А. Тихменев, *Историческое обозрение Российско-Американской компании и действий ея настоящего времени*, ч. 1, Санкт-Петербург, 1861, стр. 76-78.
- 拙書「ロシア領アメリカにおけるロシア—アメリカ会社」[1799-1802]
- (18) 『群馬県立女子大学紀要』第十八号、平成九年、六五頁—六六頁。  
Н. Н. Волховитинов (orig. ред.), *История Русской Америки* (1732-1867), Т. 1, М., 1997, стр. 196.
- (19) Лебедева はノーベシエフ—ラストキン会社の被雇用者。本

稿ではレーンズエフツィと表記せよ。Шелиховцыはシエーリホフ  
「ローリコフ公社の被雇用者。シエーリホフツィと表記せよ」。

- (20) Волховитинов(от.ред.)указ.соч.,стр.195.
- (21) там же,стр.197.
- (22) там же,стр.194.
- см.П.Н.Павлов (от.ред.), К истории Российско-Американской  
Компании (Сборник документальных материалов), г.  
Красноярск,1957,стр.15.
- (23) Волховитинов(от.ред.)указ.соч.,стр.164-167.  
バラノフが一七九三年七月二四日付シエーリホフ宛の手紙の中  
でレーンズエフツィの妨害行為を対立状況を訴えて居る。  
P.A.Tikhmenev, A History of the Russian American Company.  
vol.2 documents Kingston(Canada),1979,document No.9,pp.32-34.
- (24) Волховитинов(от.ред.)указ.соч.,Т.1, стр.193.
- (25) там же,стр.187-188.
- (26) 一七九八年四月二八日付バラノフの Поломонной への手紙に  
「去年 Коповалов (Коновалов) が去った後われわれが Chugach  
を占領し` Kuskov (Кусков) に委ねた」と書かれたこと。  
Tikhmenev,op.cit.,document No.23, p.92.
- (27) Волховитинов(от.ред.)указ.соч.,Т.1, стр.188-189.
- (28) Танаина は言語分類上では Athapascan-Eyak に属せよ。Cook  
Inlet を取り囲むように居住地域が広がっている。Kenai 半島の原  
住民族である。
- (29) 前掲のバラノフの Поломонной への手紙に於て、総計で約  
二十五人のプロムイシユレンニキ (狩猟業者)と百人ほどの服属  
現地民が殺害された。  
Tikhmenev,op.cit.,document No.23, p.92.
- (30) この要塞には一七九四年ヴァンクーファー指揮下のイギリス探検  
航海隊が来訪し、歓迎を受けた。ヴァンクーヴァーはこの要塞と  
人々について観察記録を航海日誌に残している。  
George Vancouver(W.Kaye Lamb ed), A Voyage of Discovery to  
the North Pacific Ocean and round the world 1791-1795, with  
an Introduction and appendices (in 4 volumes), London, 1984,  
pp.1256-1258 (ペーニズ全巻通し番号)
- (21) Волховитинов(от.ред.)указ.соч., Т.1, стр.192.
- (22) К.Т.Клехликов. Баранов : Chief manager of the Russian  
colonies in America. Kingstone(Canada), 1973, p.23. 但しこの蜂  
起はバラノフが当該地に到着する前よりロシマ側よりタナйна  
に於て蜂起者が逮捕され鎮められた。  
H.H.Bangsoft, History of Alaska 1730-1885, San Francisco,1886, pp.394-  
395.
- (23) ロシマの研究では A.P.Артемьев の一八〇二年の Sitka Tlingit  
の蜂起に関する論文がいわれに言及しなす。  
A.P.Артемьев. Восстание индейцев в1802г. в истории  
Русской Америки-Вопросы истории,1999, No.3.
- (24) 拙書「ロシマ領アメリカにおけるロシマ-アメリカ会社」1799—  
1802]
- (25) 『群馬県立女子大学紀要』第十八号 平成九年 参照
- (26) 一八〇〇年七月二四日付バラノフの Емельян Григорьевич  
Дарионов への手紙①
- Tikhmenev,op.cit.,document No.29, pp.106-120.
- 一八〇〇年七月二四日付 E. Г.Дарионов への手紙は二通あ  
る。この二つは本論文では①と②の番号をつけて区別する。①が  
document No.29 ②が document No.30 かつ P.A.Tikhmenev  
の史料集に収められている。
- (27) James George Shields, ロシマへの呼称は Яков Егорович  
Шилдз(Шильд)。
- 本稿では英語名で表記する。英国出身でロシア帝国のエカテリ  
ンブルク歩兵連隊の陸軍中尉 (поручик)として勤務。一七九二  
年以降優秀な航海士-艦長としてシエーリホフ公社で働く。  
一七九九年、オホーツクから Kodiak 島に帰る航海途上、指揮下の  
「Феникс」号が難破し、全乗組員・旅客とともに亡くなる。  
см.Андрей В.Гринен, Кто есть кто в истории Русской Америки,М.

- 2009, стр. 608.
- ロシア領アメリカにおいて船の難破は多発し重大な問題であり続けた。
- см. А. В. Гринев, Кораблекрушения русских судов при открытии и освоении Аляски и Алеутских островов, 1741-1867—Американский Ежегодник 2012, М. 2012.
- (37) この狩猟団は約千八百枚のラッコ皮を獲得して Kodiak に帰還す<sup>る</sup>。
- Болховитинов(от. ред.) указ. соч., Т.1, стр.184.  
Kodiak 島を拠点とす Tlingit land (現東南アラスカにほぼ重なる) の奥深くまで派遣せられたる狩猟団は「Главная」又は「Дальняя」партия と呼ばれた。
- (38) там же, стр.184-185.
- (39) Prince of Wales island の西岸。現 Bucareli Bay。東南アラスカの南端近く。
- (40) 南東方面での毛皮猟の実施とともに毛皮の獲得数は著しく増大した。  
一七九一年—九五五年に比較し、九五五年五月—九八年五月の期間はラッコだけでも約二倍以上になった。
- Болховитинов(от. ред.) указ. соч., Т.1, стр.187.
- (41) ロシア領アメリカ研究の泰斗 Lydia T. Black も「帝国の建設者の中で the creator of Russian America であると考えられるのは、それら Aleksandr Andreevich Baranov」と著書の中で断言している<sup>る</sup>。
- see, L. T. Black, Russians in Alaska, 1732-1867, Fairbanks, 2004, p.121.
- (42) К. Т. Хлебников, Описание Александра Андреевича Баранова, Главного правителя Российских колоний в Америке, СПб., 1835.  
前掲書 Р. А. Кхлебников, Baranov はその英訳本。本稿はこれを使用<sup>す</sup>。
- (43) Кхлебников, Baranov..., р. xvi.
- (44) Н. Н. Болховитинов, Завещание Н. П. Резанова—Вопросы истории, 1994, No. 2, стр. 166.
- (45) Артемьев, указ. соч., стр. 141.
- (46) Болховитинов(от. ред.) указ. соч., Т.1, стр. 192.
- (47) К. Т. Хлебников, Историческое обозрение о занятии острова Ситхи, с известиями о иностранных кораблях (1831 г. июня 21, Новоархангельск)  
これは著者が仕えた三番目の総支配人 Барон Фердинанд Петрович Врангель(1830-35) の夫人 Елизавета Васильевна Баронесса фон Врангель に贈った手稿本である<sup>る</sup>。  
この手稿は А. Р. Артемьев による The State Archive of Estonia の the papers of Wangel family の中で発見され、詳細な序文とノート付で公刊された。
- А. Р. Артемьев, Из истории освоения русскими острова Ситха (Баранова), Владивосток, 1994, документ No.1, стр. 12-23.  
これは Sitka 定住地の建設から一八〇二年の Tlingit の攻撃による壊滅までの過程の基本史料である。本稿は史料としてこれを用いる。これは一八三三年に雑誌「Радуга」に掲載された後、一八六一年に雑誌 Морской Сборник の付録の資料集の一部として再刊。
- см. К. Т. Хлебников, Первоначальное поселение русских в Америке—Материалы для истории русских заселений по берегам Восточного океана, Вып. IV, СПб., 1861.  
本稿の引用部分、Артемьев, указ. соч., стр. 14.
- (48) F. d. Laguna, op. cit., p. 169.
- (49) 一八〇〇年七月二十四日付 Дарюнов への手紙<sup>①</sup>。Tikhmenev, op. cit., p. 113
- (50) Кхлебников, Baranov, p. 23.
- (51) Yakutat Kwáan' Eyak も同じには居住、当地の Tlingit-Eyak もロシア人の進出—定住地建設に次第に好意的でなくなる。  
拙書、前掲書「ロシア人のヤクutat 行—一七九四年」参照
- (52) Tlingit についてのパラノフのこの考えは、Кхлебников のパラノフ伝の中で述べられている<sup>る</sup>。

Khlebnikov, Varanov, p.17.

しかしこのバラノフの考えは典拠が不明である。Артемьевはペテルブルグの本社へのバラノフの報告の一つに含まれると考えられている。

Артемьев, указ. соч., стр.141.

(53) Khlebnikov, Varanov, p.17.

(54) 船の難破は繁雑に起り、多くの人命や積荷の毛皮も失われた。一七四一〜一九九年の間に総計二八艘の船が遭難。平均二年に一艘が難破したことになる。

Гринёв, Кораблекрушения русских судов... стр.254.

例えば一七九九年には「Северный Орёл」号（通称 Орёл 号）が Prince William Sound で難破。Погомошной と彼の家族五人が溺死し、積荷の毛皮も大量に失われた。同年大量のロシア領アメリカへの補給物資を積んで Okhotsk から Kodiak 島に向った「Феникс」号 (J.Shields 指揮) が難破。難破の日時も場所も不明でバラノフは長期間捜索を行い、一八〇〇年にやっと難破を確認した。Дарионов への手紙①で「最大の不幸はわれわれの船 Phoenix が難破しすべての輸送物資と積荷が失われたことでも」と述べている。 see, Tikhmenev, op.cit., p.106.

(55) 名称は Новоросийск 又は Главороссия

(56) Yakutat 定住地の混乱は一七九九年バラノフが Sitka に行く途中ここに立ち寄り、調査・審問の結果、移住者の長として Погомошной を Н.Мухин に交替させたことと鎮静化した。この定住地内のロシア人間の対立に Yakutat toion Хатгеекс Федор も引き入れられた。

А.В.Гринёв, Индейцы Тлинкиты... стр.108.

(57) там же

(58) 参照 註47

(59) К.Т.Кhlebnikov, Varanov... (前掲書)

(60) Н.Н.Вангоф, History of Alaska 1730-1885, (前掲書)

(61) 参照 註7

(62) Tlingit 側の状況の解明の成果をロシアの研究者の中では特に

А.В.Зорин が取り入れている。例えば彼は一七九八〜一九九年の Sitka Kwáan の clan と近接する Angoon Kwáan の clan 間の抗争と Sitka Tlingit-ロシア関係の変化の関連性に言及。

см.А.В.Зорин, Индейская Война в Русской Америке, Курск, 2002, стр.87-91.

(63) F.de Laguna 自身がこれを指摘している。

F.de Laguna, op.cit., p.166

(64) Гавриил Терентьевич Талин (1773〜) полпоручк (陸軍少尉) 十二等 С штурман (航海士)。

(65) Tikhmenev, op.cit., p.108.

しかし Талин への指示を全く実行しな。 ibid., p.109-110. see, Khlebnikov, Varanov... pp.25-27. バラノフへの Талин の不服従について。

(66) Баранов への Kodiak 出発日は史料により異なる。四月十日 (Н.Н.Вангоф) 五月二十五日 (Khlebnikov, Varanov...) 五月三十日 (Дарионов への手紙①)。

(67) Дарионов への手紙① Tikhmenev, op.cit., p.112.

(68) Н.Н.Вангоф, op.cit., p.386.

(69) Иван Александрович Кусков (1761-1823) 巴拉ノフが最も信頼する副官。

一七九八年からレーヴェシェフツィが去った後の Константиновская крепость (Nuchek) の指揮・管理を委ねられる。

(70) Гринёв, Индейцы Тлинкиты... указ. соч., стр.109.

(71) Н.Н.Вангоф, op.cit., p.386.

(72) 詳細な情報に Зорин が記述。 А.В.Зорин, указ. соч., стр.85.

(73) F.de Laguna, op.cit., p.169.

(74) Вангоф, op.cit., p.386.

(75) ibid., pp.386-387.

(76) ibid., p.387.

(77) 確認できず Sitka 到着日は七月七日又は八日。 Yakutat に寄港したかの Sitka へ。

Дарионов への手紙①には七月八日到着と記される。

Tikhmenev, op. cit., p. 109.

Vancouver の記述とは異なりバラノフは Kodiak に戻ったと推測される。その後再度出発したと考えると Хлебников が記す Kodiak 出発日五月二十五日や Дарионов への手紙①の同五月三十日頃も可能であり、Vancouver の同四月十日説も成り立つ。五月未出発ならば Yakutat への到着日六月十二日も整合性がある。

(78) F. de Laguna, op. cit., p. 169.

(79) *ibid.*

(80) Дарионов への手紙① Tikhmenev, op. cit., p. 109.

(81) Иван Григорьевич Подомошник(Подомошников) 当時 Yakutat のロシア人植民者 (Посельщики) グループの長であった。そして一七九六年に設置された Yakutat 定住地の長 (староста) に任命された。一七九九年解任され、Yakutat からの帰途「Северный Орёл」号の難破に遭遇し家族とともに亡くなった。

(82) Степан Фёдорович Дарионов イルクーツクの第三ギルド商人。

一七九六年 Yakutat 定住地でプロムイシユレンニキ (ロシア人狩猟者) への Koniaghi の長 (Глава) に任命された。Подомошникとの対立が続いた結果一七九九年夏彼とともにバラノフにより解任された。

(83) Хлебников, Варапов..., p. 26.

(84) 上陸地点は現 Old Sitka。現 Sitka の六マイル北。ここに最初のロシア定住地が建設された。

(85) Талин の不服従行動について。

Дарионов への手紙① Tikhmenev, op. cit., pp. 110-111.

(86) Vancouver によれば上陸した時に新来者の動きを見ようと現地民の群が集まっていた。Vancouver, op. cit., p. 387.

(87) Хлебников, Историческое обозрение..., стр. 14.

これを英訳した史料が註への「Anóoshi Lingít Aaní Ka, Russians in Tlingít America」に収められている。その英訳史料には詳細な註が有り、この資料の補足資料として有用である。従って原史料の理解のためこれも用いるつもりである。

K. T. Khlebnikov, "Initial Settlements of Russian in America" in

N. M. Dauenhauer (eds), Anóoshi Lingít Aaní Ka..., pp. 173-184.

(88) Хлебников, Историческое обозрение... (原史料) では三人の тоен 15 「1. Скаутгер, 2. Скаагагечь и 3. Коуххан」と記されている。стр. 14.

しかし今日、Tlingit の側からの研究で、より正確に人物名や clan が特定できている。

Khlebnikov, Initial Settlements..., p. 182, note 9.

当時彼の Haus 現在の Castle Hill だった。

(89) Зорин, указ. соч., стр. 90-91.

(90) Дарионов への手紙① Tikhmenev, op. cit., pp. 111-112.

(91) Tlingit ち貝を食うなど。

(92) Хлебников, Историческое обозрение..., стр. 14.

Дарионов への手紙① Tikhmenev, op. cit., pp. 110-111.

(93) Хлебников, там же

(94) Хлебников, там же, стр. 15.

(95) Sitka 定住地建設の様子については次の三史料を参照。

(a) В. А. Александров (от ред.), Русская Америка в «Записках»

Кирилла Хлебникова, М., 1985, стр. 43.

(b) 一八〇〇年五月十四日付 Ф. Я. Родионов へのバラノフの手紙

Tikhmenev, op. cit., document No. 26, p. 102.

(c) Дарионов への手紙① Tikhmenev, *ibid.*, p. 111-112.

二月十五日までに定住地の長の家も準備され、バラノフも煙に苦しめられた仮設の Баня からヤコウヤウに移った。

(96) Родионов への手紙 Tikhmenev, op. cit., p. 102.

(97) Хлебников, Варапов..., p. 28.

(98) В. А. Александров (от ред.), указ. соч., стр. 43.

(99) Дарионов への手紙① Tikhmenev, op. cit., p. 112.

(100) イギリス船に対してボストン (アメリカ) 船がこの地の現地民との交易で優位に立ちつつある状況について。

*ibid.*

(101) ボストン人が貿易で莫大な利益をあげる方法として三角貿易を説明。

- ibid.,pp.112-113.
- (10) ibid.,p.113.
- (103) Василий Георгиевич Медведников(～1802) 一八〇〇年四月にバラノフが完成間近の Sitka 定住地を去る時、その長に任じられた。一八〇二年の Михайловская крепость が Plingit の攻撃で壊滅した時死す。
- (104) Хлебников, Историческое обозрение..., стр.15.
- (105) Там же,стр.15.
- (106) Хлебников, Ваганов...,pp.29-30.
- Артемьев, Восстание индейцев...,стр.141.
- (107) Хлебников, Ваганов...,p.30.
- (108) Дарионов くの手紙① Тikhmenev,op.cit.,p.113.
- (109) ibid.,pp.113-114.
- Хлебников, Ваганов...,p.30.
- その詳細については см. Зорин,указ.соч.,стр.100.
- (110) Хлебников, Ваганов...,p.30.
- Дарионов くの手紙① Тikhmenev,op.cit.,pp.113-114.
- (111) バラーノフ自身が Дарионов くの手紙①とそれを認めている。
- Тikhmenev,ibid.,p.114.
- (112) Хлебников, Историческое обозрение..., стр.15.
- Главный топоним Котляев の親族が他の者より頻繁に行ったと著者は書く。
- (113) Артемьев, Восстание индейцев..., стр.142.
- (114) Дарионов くの手紙① Тikhmenev,op.cit.,p.114.
- (115) 前掲の Дарионов くの手紙 Тikhmenev,ibid.,p.102.
- (116) N.M.Dauehauer...(eds),op.cit.,p.133. 49ページの宛先は Yakutat または St.Elais Post の人。
- (117) ibid.
- (118) 現 Нeines 近郊の Луна Canal と Шилкат の村々の人々。 см. ibid.
- (119) ibid.
- (120) Тikhmenev,op.cit.,document No.26, p.102.
- (121) 上の Наставление は次の史料集に所収。

- Павлов П.Н. (ор.ред.). К истории Российско-Американской Компании,об.докум.лов.Красноярск,1957,документ No.8,стр.95-106.
- この документ のタイトルはこの史料集の編者がつけたものと考えられる。《локью》《туземному》は当時使用されなかつた。
- see,N.M.Dauehauer...(eds),op.cit.,pp.147-154. (英訳) (p.152 note c)
- これは一八〇〇年四月十九日付であり、この原本は Old Sitka で書かれ、おそらく出発直前に Медведников に手渡されたと考えられる。この史料にはしかし場所として Павловская Гавань (Kodiak 島の港) との記載があるので、史料自体は Kodiak での写しであることが示す。
- なお本稿は日付は原則露暦(ユリウス暦)を使用。十八世紀では露暦に十一日を加えればグレゴリオ暦に直る。
- (122) Katur 又は Kaiturka はロシアアメリカ会社に年季奉公をしてゐる労働者で様々な民族から構成される。時には奴隷も含まれる。
- (123) 第四章は Павлов(ор.ред.), К истории...,стр.100-101.
- (124) Там же,стр.101. 第五章は стр.101-102.
- (125) N.M.Dauehauer...(eds), p.154,note 26.
- (126) Закачик については see, ibid.,p.154,note 27.
- 通常はロシアアメリカ会社の職員と地域の村のリーダーの仲介者として行動する第二リーダー。
- (127) Павлов(ор.ред.),указ.соч.,стр.101.
- (128) Там же.
- (129) Там же.
- (130) Там же,стр.101-102.
- (131) Там же,стр.102.
- see,N.M.Dauehauer...(eds),op.cit., p.154, note 26.
- ロシア語で Тоен 又は Тоюн、英語で Toion、これは現地民の clan の長に近いが、正確には定義はまだできない。現地民の社会構造により異なる。
- (132) この地名は現在の地名と異なっている。
- see, N.M.Dauehauer...(eds), ibid.,notes 29,30.

- (133) 積荷は船に積む際にはその船の貨物上乗り人に (Сидловому старосте, super cargo) 目録に従って引き渡し、受領証を彼が発行する。  
Павлов(от.ред.), указ.соч., стр.102.  
N.M.Dauehauer...(eds).op.cit., p.151.
- (134) Павлов(от.ред.), там же, стр.103.
- (135) там же.
- (136) там же.
- (137) там же, стр.103-105.
- (138) там же, стр.104.
- (139) там же, стр.104-105.
- (140) там же, стр.105-106.
- (141) 第一章は там же, стр.95-96. 引用は p.96.
- (142) там же, стр.96. ハラーノフはこうすれば次第に Tlingite がロシア人に好意を持つ可能性があると考えている。
- (143) там же.
- (144) там же.
- (145) там же.
- (146) Хваров は Tlingite name ではなく、ロシア人のニックネーム、あるいは「病気の人」を意味する彼につけられた渾名。  
N.M.Dauehauer...op.cit., p.152, note 5.
- (147) Стрес (от.ред.). Ibid., pp.152-153, note 7. Шакавчуйей が彼の後任となる前にハラーノフが交渉してきた相手である元の Тойон かもしれない。
- (148) Павлов(от.ред.), указ.соч., стр.96.
- (149) N.M.Dauehauer...op.cit., p.153, notes 8,9.
- (150) Ibid., p.153, note 10.
- (151) Павлов(от.ред.), указ.соч., стр.96.
- (152) там же, стр.97.
- (153) там же.
- (154) N.M.Dauehauer...(eds).op.cit., p.153, note 11.
- (155) Ibid., note 13.
- (156) Ibid., note 12.
- (157) Павлов(от.ред.), указ.соч., стр.97.
- (158) там же, стр.97-98.
- (159) 第二章は там же, стр.98-100. 今後の定住地に建設される建物への詳細な指示。
- (160) Хлебников. Историческое обозрение..., стр.13.
- (161) 反ハラーノフ派の人々の動きとそれが Kodiak 島の遠地域にも影響を広げていることについて、一八〇〇年七月二四日付 Дарионов への第二の手紙の中でハラーノフ自身が詳しく記述する。  
Дарионов への手紙② Тikhmenev.op.cit., document No.30, p.121.  
Khebl'nikov.Vaganov..., p.31.
- (162) Khebl'nikov.Ibid., pp.31-32.
- (163) 一八〇一年三月二二日付、ハラーノフの Дарионов への手紙。  
Тikhmenev.op.cit., document No.31, p.123. 上の手紙を Дарионов への手紙③と称す。
- (164) Дарионов への手紙② Тikhmenev.op.cit., p.121. (物資供給の依頼)
- (165) Дарионов への手紙③ Тikhmenev.Ibid., p.122. (一八〇〇年七月二四日使者 Поторочин へ Ваглантов を含むラシカに派遣した手紙)
- (166) Khebl'nikov.Vaganov..., p.34.
- (167) Дарионов への手紙③ Тikhmenev.op.cit., pp.126-127.
- (168) Ibid., pp.124-125, p.127. (一八〇一年五月に発生した聖職者の反抗)
- (169) Khebl'nikov.Vaganov..., p.34.  
см. Болховитинов(от.ред.). История Русской Америки 1732-1867. Т. II. М.1999, стр.49-50.
- (170) Дарионов への手紙④ Тikhmenev.op.cit., pp.126-127.
- (171) Болховитинов(от.ред.), указ.соч., Т. II, стр.52.
- (172) Khebl'nikov.Vaganov..., p.35.
- (173) 法的には会社が獲得した毛皮すべてがプロムイシユレンニキとの契約により、まず最初に彼らと会社 (РАК) の間で等分に分配されねばならなかった。

- (172) Болговитинов(от ред.), указ. соч., Т. II, стр. 51.  
Клебников, Варанов... p. 36.
- (173) Ibid., pp. 36-37.
- (174) Ibid., p. 37.
- (175) Ibid., pp. 37-38.
- (176) Хлебников, Историческое обозрение..., стр. 15.  
拙書「G. ヴァンクーヴァー指揮下のイギリス探検航海隊の  
Prince William Sound 調査と北米アラスカ岸のロシア人」『群馬県  
立女子大学紀要』第二十九号、平成二十年、一七五頁。